

27年9月研修会
「二上山博物館 と
馬見丘陵等の古墳を巡る」
資料

奈良・人と自然の会

歴史文化クラブ
(9月15日)

行程表

- 8:30 近鉄西大寺駅前 出発
(全行程：マイクロバスで巡ります)
- 9:20 武烈天皇陵及び志都美神社 (徒歩移動、約10分)
- 10:30 二上山博物館
(学芸員様の解説で見学：約1時間)
- 11:50 牧野古墳 (石室内見学)
- 12:10 馬見丘陵公園館
(自由見学と昼食)
- 13:00 古墳を歩く：ナガレ山古墳、巢山古墳 (徒歩移動、約50分)
13:50 竹取公園で「かぐや姫伝説」解説
- 14:00 竹取公園 駐車場・出発
- 14:30 島の山古墳・比売久波神社
(時間があれば、周濠を歩く)
- 15:10 廣瀬神社
- 16:00 近鉄西大寺駅前 着・・・解散

(歴文・9月研修会配付資料)

今回の研修会では、香芝市、広陵町、河合町、川西町の博物館、古墳、神社などを巡り、石器時代から近世に至る、歴史の渚を彷徨いたいと思います。

(担当：岩本先生、森英雄、坂東久平)

二上山博物館 (入館料：200円、学芸員様に説明をお願いしている。)

奈良県と大阪府の境に接し、左右に金剛・葛城山系と信貴・生駒山系を従える二上山。『万葉集』にも詠まれ、万葉の「ふたかみやま」として古代史の舞台ともなった。はるか昔、千数百万年前に大噴火した火山である。

その活発な火山活動によって多くの火成岩が分布しているが、なかでもサヌカイト、凝灰岩、金剛砂はその後の人類文化の発展に大きく寄与した岩石、鉱物である。

サヌカイト：旧石器時代(約2万5千年前)に人々は石で作った道具(ナイフ、鏃、など)を使って生活をしていた。この時鋭利な形に割れるサヌカイトが役に立った。

凝灰岩：5世紀から6世紀の古墳時代に、棺桶は木製から石製となり、大和では加工しやすい二上山の凝灰岩が主に使われた。これ以外に高級石材としては、高砂市の竜山石や阿蘇のピンク石が権力者の石棺に使用された。飛鳥・奈良・平安時代には、建物の礎石や石仏、灯籠などに使用された。

金剛砂(石榴石)：奈良時代から玉石として、また金工や木工の研磨剤として使用されてきた。江戸時代や明治時代には本格的な採掘が行われ、研磨剤として全国に販売された。

二上山博物館は、この3つの石と人びとの暮らしをテーマに、歴史的風土と自然の特徴を親しみやすく視覚にうったえた博物館である。

国宝：金銅威奈大村骨蔵器(二上山博物館に複製、復元が展示されている。)

詳細は下記③を参照下さい。

御陵と古墳・神社

①武烈天皇陵

傍丘磐坏丘北陵(かたおかのいわつきのおかのきたのみささぎ)

山形で詳細不明、(大塚陵墓参考地(新山古墳)が武烈天皇の御陵との説もある。)

武烈天皇は、仁賢天皇の皇子であるが後継者が無く、継体天皇が次の位に就く。日本書紀には、武烈天皇を暴君に仕立てているが、古事記は暴君としての記述は無い。

新山古墳

馬見古墳群・南群に属し初期(4世紀)に築造され、全長約126メートル、後方部幅67メートル、高さ約10メートル、前方部幅約66メートルほどの前方後方墳である。

銅鏡34面ほか多数の副葬品が出土している。(銅鏡の内、方格規矩鏡(倭鏡)が有名)

②志都美神社

ご祭神 天兒屋根命、中筒男命、蒼田別命

志都美神社の社叢（奈良県指定・天然記念物）：社殿の背後に広がる森（社叢）は北にある武烈天皇陵の樹叢と一体となって、自然林として残されている。巨樹は少ないが、コジイ（ツブラジイ）を優占種とする照葉樹林の見事な林相が形成されていて、学術上きわめて貴重な自然が保たれている。

本殿は三間社流造で、江戸時代中期の建立と考えられる。元禄年間（1688～1704）に盲目の僧侶が境内で湧いていた清水で目を洗って靈験があったとの伝承がある。

③大坂山口神社（穴虫）：今回は訪問しません。

祭神：大山祇命、須佐之男命、天兒屋根命

大坂山口神社は別に交通の要所に鎮座しているので、『日本書紀』崇神紀に「赤盾八枚、赤矛八竿を以て、墨坂神を祠れ。亦黒盾八枚、黒矛八竿を以て、大坂神を祠れ」とあるように、墨坂神も交通の要路に鎮座して、奉られた武器を守りとして国中の境を祀る神の意味もあったようだ。

古くは相撲神社として近くの村々に知られていた。石積みの観覧席は、当時の様子を物語っている。国宝の「金銅威奈大村骨蔵器（こんどういなのおおむらこつぞうき）」は、神社の裏山（ゴボ山）から出土した。

国宝：金銅威奈大村骨蔵器（二上山博物館に複製、復元が展示されている）

江戸時代の明和年間に発見されたもので、甕を伏せた下からこの骨蔵器が出土したと伝えられる。球形の容器で、蓋と身が半球形に分かれる特殊な形である。威奈大村骨蔵器は蓋裏に1行10字詰め39行319字におよぶ銘が刻まれている。これには、威奈大村が宣化天皇の子孫にあたり、持統朝に任官、文武朝に少納言、大宝令制定とともに従五位下すなわち貴族に列せられ、慶雲2年（705）に越後守に任ぜられるが、同4年に任地で歿したこと、そして故郷の大和の葛城下郡山君里、今の香芝市穴虫の地に葬ったことが記されている。

④牧野古墳（ぼくやこふん）（石室内部を見学します：ライトを準備下さい。）

古墳時代後期（6世紀末）の円墳、直径約55m・高さ約13m。全長約17.1m。玄室部長さ約6.7m・幅約3.3m・高さ約4.5m、羨道部長さ約10.4mで、県下でも屈指の規模を誇る。石室石材には花崗岩を使用、室内には刳貫き式家形石棺と組合せ式家形石棺が置かれていたという。

被葬者は敏達天皇の皇子・押坂彦人大兄皇子であると推定されている。

⑤馬見丘陵公園（丘陵公園館、ナガレ山古墳、巢山古墳）

丘陵公園館（入館無料：公園内の古墳や自然の展示） 自由行動

馬見古墳群・中央群は、4世紀後半から5世紀前半に造営されており、巢山古墳→ナガレ山古墳→乙女山古墳の順に築造されたとされる。

《乙女山古墳（おとめやまこふん）全長約130m、後円部高さ約14.7mの帆立貝形古墳。

日本最大の帆立貝形古墳は、**男狭穂塚古墳**（おさほづかこふん）で、全長約 175m、後円部高さ約 18m（宮崎県西都市の西都原古墳群。）」

ナガレ山古墳

5 世紀前半の前方後円墳。後円部は三段、前方部は二段に築成、全長 105m、後円部径 65m、高さ 8.75m、前方部幅 70m、高さ 6m。東側半分が築造当時の姿に復原されており、貼り石や円筒埴輪が築造時の偉容を見せている。

巢山古墳

4 世紀末～5 世紀初めの前方後円墳、馬見古墳群の中で最大級の規模を誇る。全長約 220m、後円部径約 130m、前方部幅約 112m。陵墓には指定されていないが、大王の墓と考えられる。張出部からは死者の霊を運ぶとされる水鳥形埴輪、権威を象徴する蓋（きぬがさ）の埴輪などの形象埴輪が出土した。平成 20 年には、周濠から被葬者の遺体を実際に運んだと考えられている実物大の木製「喪船」が見つかっている。

⑥竹取公園（竹取物語のあらすじは別紙参照下さい。）

馬見丘陵公園に隣接した公園で、子供達の遊び場や古代の住居復元など。かぐや姫伝説の場所なので、竹取公園と名付けられている。約 1500 年前の古墳時代の住居を学術的に復元している。
（丘陵公園館から竹取公園へは徒歩で移動、バスは竹取公園駐車場に移動）

⑦島の山古墳

4 世紀末～5 世紀初頭の 3 段築成・前方後円墳で、全長 200m、後円部径 98m、高さ 18m、前方部幅 93m。周濠を巡らすが、近代に水田化していたものを修復。後円部の竪穴式石室に長持形石棺が納められていたが、明治 15 年に盗掘された。石室天井石が持ち出され、その一部は隣接する比売久波神社に残されている。

1996 年に前方部で粘土槨が発掘され、木棺を粘土で覆った後に、車輪石 80 点、石釧 32 点、鍬形石 21 点を並べていた。

（巢山古墳同様、大王級の墓と考えられる）

⑧廣瀬神社（詳細は別紙参照下さい。）

主祭神：若宇加能売命（わかうかのめのみこと）・廣瀬大忌神（ひろせおおいみのかみ）とも社伝では伊勢神宮外宮の豊宇気比売大神、伏見稻荷大社の宇加之御魂神と同神とする。龍田大社の龍田風神とも関係があるとしている。ただし、本来の祭神は長髓彦であるとする説もある。

2 月 11 日 例祭（御田植祭）は、「砂かけ祭り」として有名。

以上

馬見丘陵を訪ねる

1、 **馬見丘陵とは** 奈良盆地西部、東を高田川、西を葛下川、北を大和川に限られた洪積層の台地。南北7キロ、東西3キロの長円形で、比高約25メートル。南から大和高田市の北部、香芝市、広陵町、上牧町、河合町に及び、旧郡制下の葛下郡・広瀬郡にまたがる。丘陵は浸食を受けて無数の小谷が樹枝状に入り、谷を利用した小溜池群がある。丘陵は一に豆山(まめやま)ともいい、「豆山三里小石なし」といわれるように、古くから開墾されている。

馬見は「馬貝」の誤写で、馬飼のこととする説があり、牧山庄(上牧町)、牧野墓(広陵町)、上牧・下牧(上牧町)、馬原部(広陵町大字大塚)、駒坂・バクヤ(上牧町上牧)、駒壁(大和高田市大谷)などの名称から丘陵上が牧地であったことも推定され、上牧からは多量の獣骨が出土している(『奈良県の地名 日本歴史地名大系30』平凡社、1981年)。

なお、近年注目されている複合遺跡として、丘陵西南端部に位置する下田東遺跡(香芝市下田東2・3丁目一帯)があり、縄文～中世にいたる遺物が出土している。

また、弥生時代中期の銅鐸が文化年間(1804～17)に、上牧町上牧小字観音山で出土(現静岡市立登呂博物館蔵)しており、この銅鐸は出雲加茂岩倉遺跡で出土した39個の銅鐸のうち、第17号銅鐸と同范であるとされている(『古代出雲とヤマト王権』近つ飛鳥博物館、2015年、33頁)。

2、 **馬見丘陵古墳群** 古墳は4世紀後半から6世紀末葉に及ぶ大小約1000基に及ぶ。そのうち巢山古墳(前方後円墳)は全長約220メートルに達する。これらの古墳群は葛城の中核と考えられているが、「私案ではこの古墳群も大和政権の中核の古墳群であると考えている。」という見解がある(河上邦彦「大和・馬見丘陵地域」『全国古墳編年集成』雄山閣出版、1995年)。葛城氏のうち、葛下地域に勢力があったとされる葦田宿禰の系統に関係するかとも思われる。

3、 古代史の諸相

① 陵墓

孝霊天皇陵	片丘馬坂陵	王寺町本町3丁目	文久3年(1863)治定
顕宗天皇陵	傍丘磐坏丘南陵	香芝市北今市	明治22年(1889)治定
武烈天皇陵	傍丘磐坏丘北陵	香芝市今泉	明治22年治定

押坂彦人大兄皇子と成相墓 敏達天皇の第一皇子、舒明天皇の父。忍坂日子人太子、麻呂子皇子ともいう。母は息長真手王の娘の広姫。『日本書紀』用明2年(587)4月条に、大臣蘇我馬子と対立する物部守屋大連と結んだ中臣勝海連が、皇子と竹田皇子の像をつくり呪詛したが、事の成し難いを知ってかえって皇子についたとある。当時有力な皇位継承候補として、継承争いと蘇我・物部両氏の争いの渦中にあっただろうが、その後、記事がみえない。馬子らによって殺害されたとする説もある。『延喜式』諸陵寮式にみえる、「成相(ならい)墓 押坂彦人大兄皇子、在大和国広瀬郡、兆域東西十五町、南北廿町、守戸五烟」を、馬見北の史跡牧野(ばくや)古墳(広陵町)にあてる説が有力である(河上邦彦「大和・馬見丘陵地域」前掲書、他に広陵古文化会『ふる里の文化財をたずねて』2016、17頁)

茅渟王と片岡葦田墓 敏達天皇の孫、押坂彦人大兄皇子の子、皇極・孝徳天皇の父。『日本書紀』の皇極即位前紀に系譜を記し、吉備内親王との間に、皇極天皇を生んだとみえ、孝徳即位前紀にも孝徳は皇極の同母弟とみえる。『古事記』敏達巻には知奴王、一本に智奴王にもつくり、日子人太子が漢王の妹大俣王を娶り生んだ子とある。『紹運録』にも茅渟王「或智奴、母大俣王、漢王女」とある。『延喜式』諸陵寮式には、「片岡葦田墓 茅渟皇子、在大和国葛下郡、兆域東西五町、南北五町、無守戸」とみえる。この片岡葦田墓については、「不詳」とする説もあるが（『訳注日本史料 延喜式 中』集英社、2007年、731頁）、香芝市平野の平野塚穴山古墳（7世紀後半）にあてられる説もある（塚口義信「茅渟王伝考」『堺女子短期大学紀要』25、1990年）。なお、この件を含めて、敏達天皇系王統の当該地域進出については、平林章仁『七世紀の古代史』（白水社、2002年）が詳細である。

高市皇子と三立岡墓 『延喜式』諸陵寮条に「三立岡墓 高市皇子、在大和国広瀬郡、兆域東西六町、南北四町、無守戸」とある。高市皇子（654?～696）は天武天皇と胸形君徳善の娘の間の子で長屋王の父。壬申の乱(672年)の活躍で、その勝利後、皇太子草壁皇子、大津皇子に次ぐ地位をたもち、太政大臣に任じられるも、持統天皇 10年に薨じた。前記『訳注日本史料 延喜式 中』は「広陵町馬見中の見立山に古墳状隆起が残り、見立山公園となっているのがこれに当るか」（732頁）とする。

和朝臣乙継と牧野墓 『延喜式』諸陵寮条に「牧野墓 太皇太后之先和氏、在大和国広瀬郡、兆域東西三町、南北五町、守戸一畑」とあり、高野新笠の父、贈正一位和乙継の墓にあたるが、『大和志』には大垣内村（現広陵町三吉）西北10町に在り、「莫邪冢」（ばくやのつか）と称するとある。ただし、『訳注日本史料 延喜式 中』（732頁）は「不詳」とする。

②王家領

長屋王領 木上司（広陵町百済キノへ）・ **片岡司**（広陵町三立岡付近）

1975～89年に平城京3条2坊で出土したいわゆる長屋王家木簡の中にみえるもので、木上司からの進上物は、米・竹（筍）・阿支比（あけび）・棗（なつめ）・糯米（もちごめ）・焼米などがある。倉庫を有する御田であり、御馬司も存在した。片岡司からは蓮葉・菁（かぶら）・奴奈波（じゅんさい）・阿射美（あざみ）・布々伎（ふき）・桃などであり、池沼の存在する御園であった（岩本次郎「木上と片岡」『木簡研究14』、木簡学会、1992、のち奈良国立文化財研究所編・発行『長屋王家・二条大路木簡を読む』2001に増補再掲）。

③寺領

弘福寺領広瀬庄（広陵町三吉）

弘福寺は川原寺の法号である。和銅2年(709)の「弘福寺田畠流記帳」（円満寺文書）と、天平20年(748)の「弘福寺三綱牒」（東寺文書）には広瀬郡に「大豆村」の地名がみえ、20町余の寺領が馬見丘陵東南麓付近にあったと推定される。下級官人を平城宮に召し出させる和銅6年5月付けの平城宮出土木簡に「大豆造今志 広背郡」とある。「大豆」はマメと呼んだとおもわれ、現広陵町三吉に小字豆田がある。

また、平安期の史料によれば、興福寺領片岡庄、法隆寺領木部庄も近隣に存在したと推定される。

広瀬大社 (河合町)

大和盆地を流れる全ての河川が一点に合流する地に鎮座し不浄を祓い豊かな稔りと成し給う水を司る神であり、朝廷をはじめ万民を守護する御膳神として古来より厚く信仰されてきた。

また日本書紀に記載されている如く、天武天皇は風を司る龍田風神と一対の社として龍田・廣瀬両社を併せ祀る事により風水を治め国家安泰・五穀豊穰を祈願された。

(御祭神)

主神： 若宇加能売命 (わかうかのめのみこと)

相殿： 櫛玉命 (くしたまのみこと) 穂雷命 (ほのいかづちのみこと)

(創建)

●崇神天皇九年(前89年)廣瀬の河合の里長に御信託があり、沼地が一夜で陸地に変化し、橘が数多く生えたこのことが天皇に伝わり、この地に社殿を建て祀られるようになる。

(社地は元水足池(みずたるのいけ)という広漠たる沼地であったが、里長廣瀬臣藤時に御神託があり、俄に陸地となり、一夜にして丈余の橘数千株が生じた。今拝殿の西側に小池があり、これを水足池という。又、当社の社紋『橘』はこの社伝による)。

(歴史)

●天武天皇4年4月10日(675年)に小錦中間人連大蓋を遣わし、大山中曾根連韓犬を齋主として大忌神を廣瀬の河曲に祀られたことが記されている。(毎年4月4日と7月4日に行われた大忌祭の始まり)。

●天武天皇13年7月、大社行幸のみぎり、新たに廣瀬川(現大和川)に架橋して龍駕を奉納したことから、この所を御幸瀬(ごごかせ)と称し、橋を御幸橋(みゆきばし)と名付けられた(日本書紀・社伝)。

天武天皇以降、歴代の天皇より、風雨の調和、年穀の豊穰等の御祈願がされ国家の瑞祥、または禍害あるごとに、奉告御祈願された。

●陽成天皇天慶2年(939年)7月26日、大和の国の廣瀬・龍田の両社に倉を建てさせられた。同13年6月14日、両神社に使いを遣わして建立された倉に財宝を納められた(三代実録)。

●春日・廣瀬・龍田の社庫の鍵は、神祇官の倉に納められており、お祭りの時派遣される勅使が、社庫の鍵を持ってこられ、お祭りが終わると神祇官に返納された(延喜式)。

◇社格：白河天皇永保元年(1081年)正一位を授けられ、明治四年(1872年)官幣大社となる。

◇社領：室町時代頃には凡そ五百余町を保有。細川管領の家門、豊臣秀長に没収され減少・衰頹。

*) 砂かけ祭： 2月11日

本来は「御田植祭」で農耕作業が順調に進み稲が無事に育ち五穀豊穰を祈願する祭りである。昔の田作りの模範田植えであり、砂を雨に見立てて雨降りを祈願するところに特徴がある。

【殿上の儀】

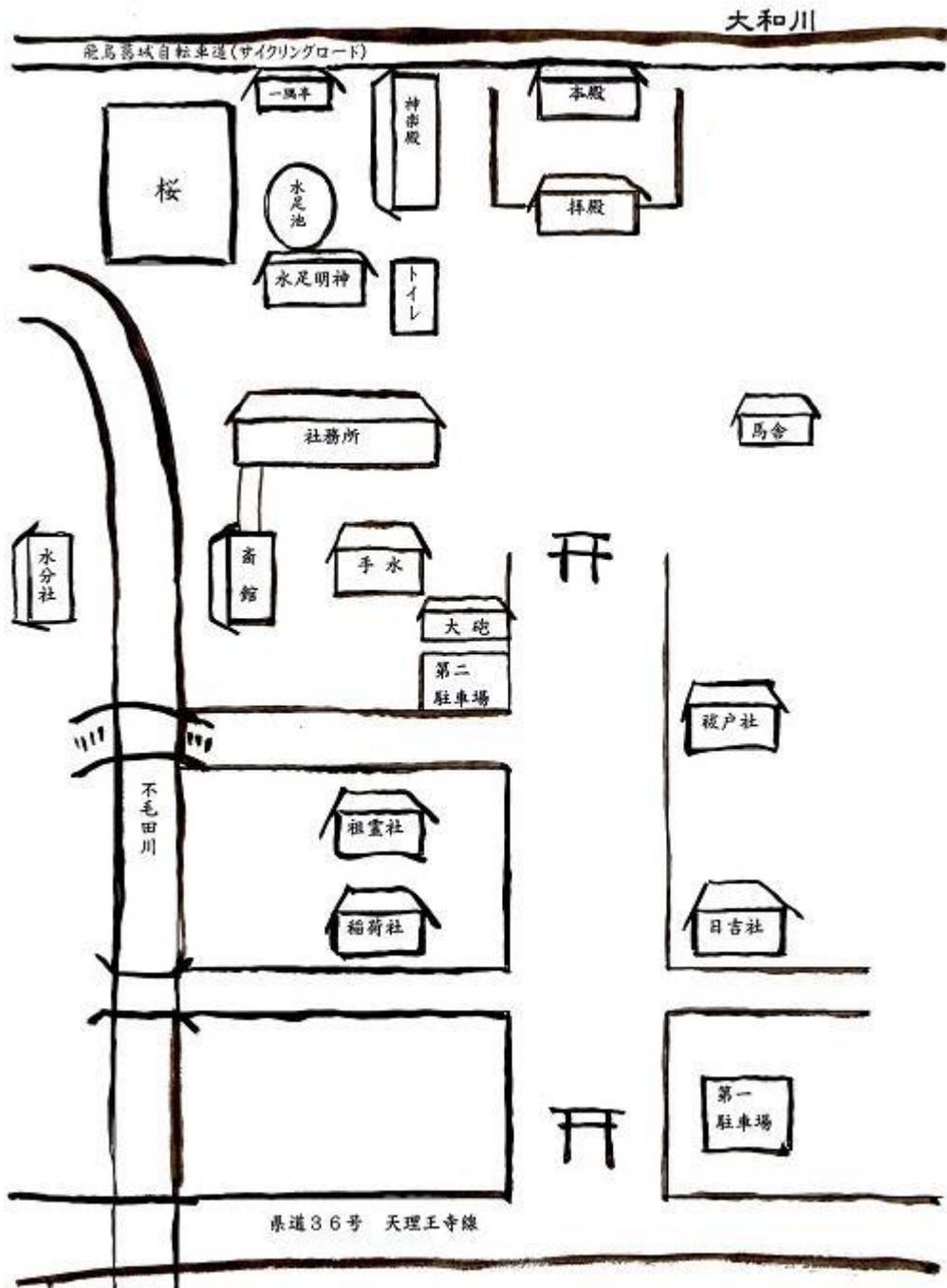
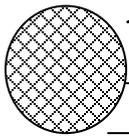
拝殿を田圃に見立て、苗代作り、苗代巡り、苗取り、田植えを行う所作をする。

【庭上の儀】

拝殿前の広場に青竹を四本立て注連縄を張って田圃に見立て同様の所作を行う。太鼓の合図で田人と牛が出て田植えの所作をした後、参拝者に砂を掛けますそれに対し参拝者が掛け返し砂合戦が始まる。この砂のかけあいには1回5分程度で8回繰り返されます

(配置図)

この辺りに『御幸橋』『御幸瀬』等あり (天武天皇行幸に因み)。



[竹取物語 [かぐや姫] — あらすじ]

① かぐや姫の生い立ち

竹を取ることを生業とする竹取の翁という老人がいた。ある日、翁は、いつものように野山に入って竹を取っていると、根元の光っている竹を見つけた。近付いて見たところ、竹の中に、かわいらしい小さな女の子が座っていた。翁は、その女の子を家に連れて帰り、妻の姫とともに育てることにした。それからわずか三ヶ月、女の子は、大人の女性に成長した。容姿は並ぶ者がいない。また、その娘を見つけて以来、翁の取る竹の中に黄金が入っていることが、たびたびあった。娘は、翁の家に光と幸福をもたらす絶世の美女となった。翁は、御室戸齋部の秋田という者と呼んで、娘に名前を付けさせた。その名は、かぐや姫。命名から三日間、数多くの男を呼んで、盛大に宴会を開いた。

② 五人の貴公子

かぐや姫の美しさは、世の男たちの知るところとなり、身分にかかわらず、結婚を希望するものが大勢現れた。中でも、女好きで知られる五人の貴公子、石作の皇子、車持の皇子、右大臣阿倍御主人、大納言大伴御行、中納言石上麻呂足は、格別の想いをかぐや姫に寄せていた。竹取の翁もまた、かぐや姫に向かって、五人のうちのいずれかと結婚するように勧める。しかし、かぐや姫は、承服しない。そんなかぐや姫に対して、翁は、結婚の条件を訊ねる。かぐや姫の条件は、自らが見たいと思う品物を持って来るようにということであった。かぐや姫の求める品々。それは、権力と財力を誇る五人の貴公子たちにとっても、入手困難な世にも珍しい品物ばかりである。かぐや姫の要求は、無理難題以外の何物でもなかった。

③ 仏の御石の鉢 - 石作の皇子

かぐや姫は、石作の皇子に対しては、仏の御石鉢を要求した。石作の皇子は、天竺にあると言われる鉢を取りに行くよう見せかけ、実際は、大和の国、十市の山寺にあった煤けた鉢を錦の袋に入れ、造花の枝に付けて、代用した。かぐや姫は、疑いの目を持って、その鉢を見た。案の定、その鉢は、全く光らない。もしも、本物の仏の御石の鉢であれば、草の葉に付いた露ほどの光だけでも発するはずであった。持参した鉢が偽物であることを看破された石作の皇子は、恥知らずにも、未練がましい歌まで贈って、かぐや姫の愛情を得ようと悪あがきする。かぐや姫の反応はにべもなく、ただ無視するだけであった。

④ 蓬萊の珠の枝 - 車持の皇子

かぐや姫は、車持の皇子には、蓬萊の珠の枝を見せるよう求めた。車持の皇子は、その指示に従い、難波から蓬萊山を探すべく出航した。しかし、それは皇子の偽装工作であり、三日ほど後には難波に戻り、珠の枝の偽造にとりかかった。車持の皇子は、我が国でも屈指の工匠を集め、領有する十六の荘園の財力を傾けて、珠の枝の偽造に全力を尽した。そうして作り出した珠の枝を竹取の翁に手渡す。同時に、入手した経緯を克明に語るという冒険譚の捏造まで行う。これには、翁もかぐや姫も騙されそうになる。しかし、そこに、六人の工匠が現れ、翁に珠の枝を作製したことへの褒美を求めた。これによって、偽造を知ったかぐや姫は、皇子に珠の枝を返品。車持の皇子が、かぐや姫を手に入れる計画は破綻した。

⑤ 火鼠の皮衣 - 右大臣阿倍御主人

かぐや姫は、右大臣阿倍御主人には火鼠の皮衣を所望した。右大臣は、唐土の王慶という人物を通じて、火鼠の皮衣を手に入れようとする。王慶からは、品物とともに、それが、唐土の物ではなく、天竺からの渡来品であり、入手が困難を極めたことを告げた書状を渡され、さらに追加の代金を要求される。その要求に喜んで応じた右大臣は、さっそく、かぐや姫に皮衣を見せた。しかし、かぐや姫は、一瞥しただけで、本物ではないという疑いの目を持つ。そして、皮衣が本物かどうかを確かめるために、試しに焼いてみることを提案する。竹取の翁も右大臣もこれには、同意し、皮衣を火の中にくべる。果たして、かぐや姫の予想どおり、皮衣は焼けてしまい、右大臣の願望も燃え尽きてしまった。

⑥ 竜の頸の珠 - 大納言大伴御行

かぐや姫は、大納言大伴御行には、竜の頸の珠を要望した。大納言は、家臣を集めて、竜の頸の珠を取って来るよう命じた。この命令に対し、家臣たちは面従腹背で応え、珠の獲得は、全く埒が明かない。そこで、大納言は、自ら海に漕ぎ出し、竜を探し求める。しばらくして、にわかには海が荒れ始めた。船は漂流し、大納言は、船頭から、嵐が竜の仕業であることを知らされる。大納言は、計画の中止を神に誓約する。その後、嵐は徐々に収まり、大納言は、播磨の浜に流れ着いた。見るからに、病人のようになった大納言は、家来の前にかぐや姫を誹謗中傷したが、かぐや姫と結婚するために離縁した妻や世間の見る目は厳しく、物笑いの種となるのであった。

⑦ 燕の子安貝 - 中納言石上麻呂足

かぐや姫は、中納言石上麻呂足に燕の子安貝が欲しいと要望した。中納言は、家来の情報から、大炊寮の屋根に、燕の巣が多数存在することを知る。足場を組んで家来を配置し、子安貝を取ろうとしたが、吉報は届かない。そこに大炊寮の役人、倉津麻呂が訪れ、足場を壊して燕の警戒を解くとともに、家来を籠に乗せて吊り上げ、燕が子を産む瞬間に子安貝を奪うという策を進言した。日没後、燕が子を産む際の動作があったため、巣の中を探らせたが、何もないという。業を煮やした中納言は、籠に乗って巣のある所まで上がった。巣の中で何かを掴んだと感じた中納言は、籠を下すよう命じる。命令に慌てた家来は、綱を引き過ぎてしまう。綱は切れ、中納言は鼎の上に落下。その事故が原因で、中納言は絶命した。かぐや姫は、中納言のことを、少し気の毒に思った。

⑧ 帝の求婚

五人の貴公子の求婚をかわしたかぐや姫であったが、美貌の噂は、帝の御耳にまで達していた。帝は、内侍中臣房子に、かぐや姫を見て参るよう命じられる。しかし、かぐや姫は、対面しようとはしない。内侍の権力を笠に着た発言に対しても、かぐや姫は妥協しない。やむを得ず、内侍は帰参して、状況を奏上する。帝は竹取の翁をお呼びになり、かぐや姫の宮仕えをお命じになった。かぐや姫は、当然のごとく拒絶する。窮余の一策として、帝は御狩を口実として翁の家に行幸なさる。かぐや姫を御覧になった帝は、即座にお捕まえになり、連れて行こうとなさる。突然、かぐや姫は影になった。思わぬ事態に、帝は、かぐや姫をお連れになることを諦められ、その後は、文通によって、かぐや姫と交流なさるのであった。

⑨ かぐや姫の昇天

かぐや姫は、月を見て、物思いにふけるようになった。理由を尋ねた竹取の翁に告白する。自分は月の人であり、八月十五日には、月に帰らなければならない。翁は激怒し、帝に警護の兵を賜うよう奏上する。帝は、二千の兵を派遣され、勅使の高野大国が、これを率いた。夜中の十二時、屋敷の周辺が光に包まれた。そこに、月の使者が現れたが、兵や家人は勿論、翁や嫗でさえ、その光景を見守る以外になす術はなく、呆然としている。かぐや姫は、月に帰る前に、両親と帝に手紙を書き、着物と不死の薬を添えて残した。ついに、かぐや姫は、着れば思い悩むことがなくなるという天の羽衣を着てしまった。最早、翁への思いすらない。かぐや姫は、飛ぶ車に乗る。そして、百人ほどの天人を連れ、天に昇った。

⑩ 富士山の煙

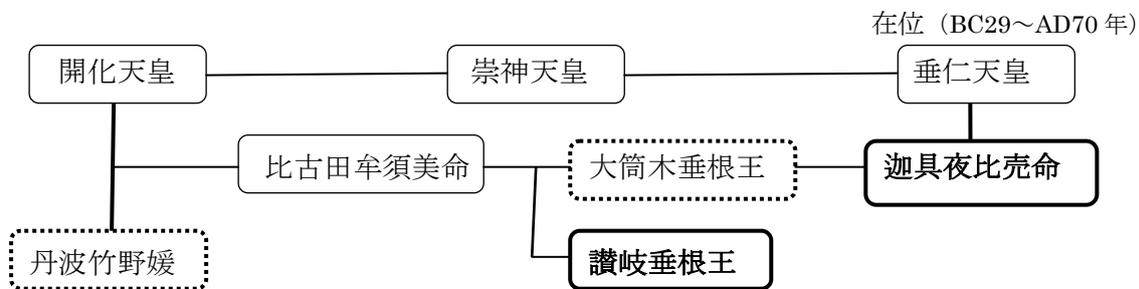
かぐや姫は、月へ帰った。竹取の翁と嫗は、血の涙を流して思い悩むが、どうしようもない。生甲斐を失った翁は、不死の薬を飲むこともなく、病気で寝込んでしまう。一方、帝は、頭中将から、事態の詳細をお聞きになり、かぐや姫からの手紙と不死の薬を受け取られる。手紙を御覧になった帝は、いたく感動なされた。帝は、大臣と公卿を召集して、天に近い山についてお訊ねになる。駿河にある山の存在をお知りになった帝は、つきのいわさかという勅使に、その山頂に赴いて、かぐや姫から献上された手紙と不死の薬を燃やすようお命じになる。そして、山を富士の山と名付けられた。富士の山からは、いまだに絶えることなく、煙が立ち昇っているということである。

(おわり)

かぐや姫（竹取物語）と讃岐神社（広陵町）

I. 竹取物語

- （・口頭伝承『かぐや姫』は古くから各地であった模様。「竹取物語」は『物語』である）
- ・『日本最初の物語』と言われる。
（源氏物語 5 4 帖の 1 7 『絵合』 卷： 梅壺が「竹取の翁」の絵を示して述べた。）
- ・成立：9 世紀終り～1 0 世紀初め （注）源氏物語：1 1 世紀初頭に世に出た。
- ・作者：不明（紀貫之、源順、空海、無名の人…） [反藤原氏の人ではなかろうか。]
- ・設定時代：天武・持統の時代（藤原京） 辺りか？ 注）壬申の乱【6 7 2 年】
（求婚者：阿倍御主人【6 3 5 年～】、大伴御行【6 4 6 年～】、石上麻呂【6 4 0 年～】
石作皇子【丹比真人嶋：6 2 4 年～】、車持皇子【藤原不比等：6 5 9 年～】）
*）文武天皇【6 8 3 年～7 0 7 年】
- ・“かぐや姫”のモデル：迦具夜比売命（垂仁天皇の妃）（古事記開化・垂仁の項より）



- ・“帝”のモデル：不明 （時代的には文武天皇が考えられるが…）
- ・“竹取り翁（讃岐造）”のモデル：不明

・設定場所（諸説あり）：

① 広陵町『讃岐神社（広陵町三吉 3 2 8）』付近

- ・大和の国に「讃岐神社」はここしかない。
- ・『讃岐神社』は『大和国広瀬郡散吉（さぬき）郷』にあり、現在も“三吉”と言う。
この讃岐郷の長が『讃岐造＝竹取翁』だったと考えられる。
- ・求婚者（藤原京）が毎日通える距離である
等々の理由により、ここを物語設定場所と考えた。

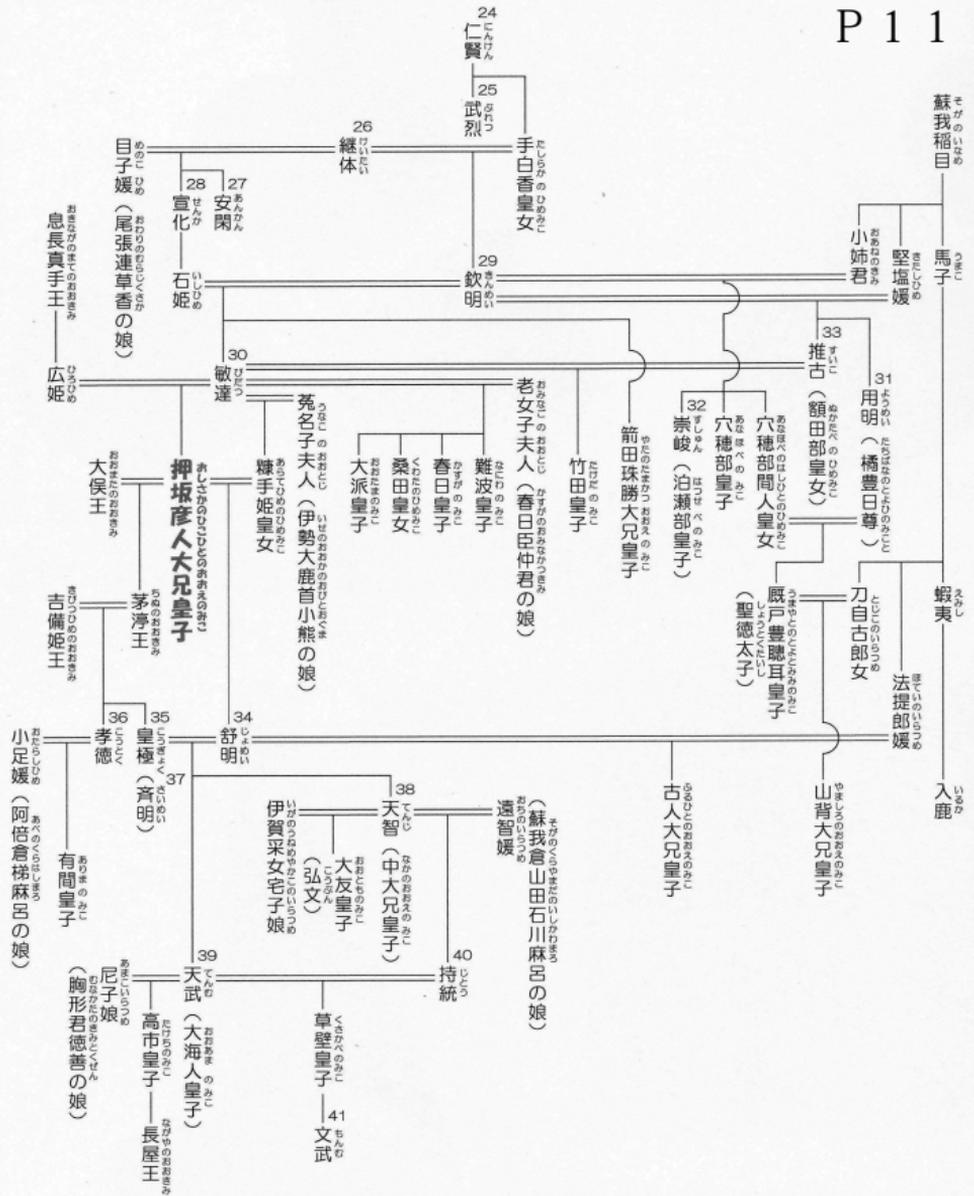
② その他の想定場所：

- ・京都府向日市、静岡県富士市、滋賀県長浜市木之本町、岡山県真備町なども
設定場所候補と名乗っているが…。

II. 讃岐神社

- ・祭神：現在は大国魂命・若宇加能売命・大物主命。しかし『三代実録』元慶 7 年の条（8 8 3 年）に『散吉大建命・散吉伊能城神が従五位下を賜る（8 8 7 年）』との記載があり、
これがこの神社の祭神であったと考えられる。
- ・このことから、一帯は讃岐国の斎部氏が移り住んだ地であり、故郷・讃岐の神を勧請し創建したものとみられる。

以上



24. 天皇家・蘇我氏関係系図 (五世紀末葉~八世紀初)
 (『広陵町史 本文編』図 63 を一部変更)